

荒井退造と「とちぎ学」

—「とちぎ学（地域学）」の人物学習における荒井退造の位置づけ—

西田直樹*

【梗概】

2015年10月、作新学院大学において実施している「とちぎ学」の授業において、現宇都宮市（旧芳賀郡清原村）出身で太平洋戦争時に沖縄県警察部長を務め、沖縄県民の避難・保護に尽力した荒井退造（1900～1945）を「特別授業」の形で取り上げた。作新学院大学（高等教育機関）において行っている「とちぎ学」の取り組みと荒井退造についての人物学習及びその位置づけについて論じた。

【キーワード】

・荒井退造　・とちぎ学　・地域学習　・キャリア教育　・作新学院大学

1 はじめに

2015年10月20日に「とちぎ学」の授業において荒井退造をテーマとした特別授業を実施した。この授業については、『下野新聞』（10月21日付）が「とちぎ戦後70年」の特集記事として取り上げた。

以下、授業の内容の記録として、下野新聞の記事を引用する。

「生きよ」の言葉残し死の道選択

荒井退造から命の大切さを

顕彰事業委の荒井俊典代表 作新大で特別授業

【宇都宮】太平洋戦争末期の沖縄県警察部長で、多くの島民を疎開させ命を救った市出身の荒井退造について学ぶ「荒井退造特別授業」が20日、作新学院大で行われ、約150人の学生が受講した。講師は荒井退造顕彰事業実行委員会の荒井俊典代表。特別授業の後、学生たちは6グループに分かれ、宇都宮大学名誉教授や県立高校の元校長ら10人をアドバイザーに、「命の大切さ」などについて議論を深めた。

特別講義は、県内の歴史や文化、地理、産業、県民のライフスタイルなどについて学んで栃木県への理解を深めるとともに、県内での就職を希望する学生に社会人としてコミュニケーション能力の基盤をつくる「とちぎ学」の一環として実施した。

荒井代表は、退造が1900年に地元の旧清原村上籠谷で生まれ、現在の清原南小、宇都宮高を卒業。警視庁の巡査になってから現在の国家公務員総合職試験に合格し、沖縄県警察部長になったことを紹介。「警察部長として、知事や議会と衝突しながらも多くの（沖縄）県民を疎開させて命を救ったことが、県民から今でも大きな評価を得ている」と説明した。

最後に、県民には「生きよ」との言葉を残して軍人ではない退造が死の道を選択したことの触れ、「県民には命の大切さを説きながら、死の道を選んだことは矛盾する。これらのことを今後、検証していくことが必要だ」と結んだ。

授業の途中、荒井代表は学生に対して「『特別攻撃隊で出撃しろ』といわれたらどうするか」と質問。学生たちは「隠れる」「逃げる」などと答えた。

6グループでの討論では退造の業績を顕彰。学生たちは「戦争の悲惨さをあらためて学んだ」「勇気ある人だ」「命の大切さを痛感した」などと話した。

(2015年10月21日 『下野新聞』 第20面)

授業の内容については、おおよそ報道された通りである。加えて、作新学院大学において6年の実施実績のある「とちぎ学」について新聞で報道された事は、大きな成果であると言える。

本稿では、作新学院において実施している「とちぎ学」（高等教育機関における地域学習プログラム）の構想と具体的な内容について示した上で、今回の「荒井退造特別授業」が「とちぎ学」の授業全体の中でどのように位置づけられるべきものかについて述べて行く。

2 「とちぎ学」について

1) 県民のための「とちぎ学」の誕生

「とちぎ学」の誕生時期を特定する事は難しい。1995年に栃木県広報協会により発行された『とちぎ学事始（とちぎがくことはじめ）』をもって公的な「とちぎ学」の誕生という事ができよう。県民の日の10周年を記念してまとめられたB 6版約150ページの冊子である。

当時の栃木県知事の渡辺文雄氏は、『とちぎ学事始』の冒頭に「とちぎ学の試みふるさを見つめ直すために」という短文を寄せている。その全文を示せば、以下の通りである。

明治6年6月15日、当時の宇都宮県と栃木県が統合され、概ね現在と同じ地域の栃木県が誕生しました。

以来120年余にわたって営々と続けられた人々の努力によって、私たちが愛する栃木県が築かれてきました。この美しく豊かなふるさとを、さらに美しく、潤いに満ちたものとして次の世代に引き継ぐことが今日に生きる私たちの務めです。

この冊子は、郷土の美しい自然を改めて見つめ直し、先人がおりなしてきた歴史の縦糸、文化の横糸をなぞり、栃木の風土に生きた人々の眼差しや掌の温もりを感じる手掛かりとしていただければとまとめたものです。栃木の全てを言い尽くすことはできませんが、本書を読まれた方が御自分で一つひとつ確かめ、さらに思いを広げ、それぞれの「とちぎ学」のきっかけにしていいただければと思っております。

また、県外から本県を訪れた方々には、この冊子がとちぎの魅力や実力の一端をご理解いただく一助となれば幸いです。

今日の栃木県が多くの先人達の努力によって築かれてきたことを改めて思い起こし、新しい時代—21世紀の“とちぎ新時代”—に向けて、県民の皆様と共にさらなる豊かで住みよいふるさと“とちぎ”を築いて行こうではありませんか。

(『とちぎ学事始』 2 ページ)

そして、この、『とちぎ学事始』は「自然」「歴史」「文化」「産業」「人物」の5章からなり、それらの要素を渡辺元知事の言葉のごとく『先人がおりなしてきた歴史の縦糸、文化の横糸をなぞり、栃木の風土に生きた人々の眼差しや掌の温もりを感じる手掛かり糸』となるものであった。この『とちぎ学事始』によって公的に生み出された「とちぎ学」は、県民及び県来訪者を主対象とした人文地理的視点から編纂された「地域学事典」と呼ぶべきものであったと位置づけ評価できる。

2) 高等教育機関のための「とちぎ学」の誕生

(1) 作新学院大学における「とちぎ学」の取り組み

前述の『とちぎ学事始』において、渡辺元知事が『本書を読まれた方が御自分で一つひとつ確かめ、さらに思いを広げ、それぞれの「とちぎ学」のきっかけにしていいただければと思っております。』と述べた言葉を受けた形で、栃木県の高等教育機関における「とちぎ学」の研究が始まったのは、2008年前後の事である。その先鞭をつけたのが、作新学院大学なのである。カリキュラム上に「とちぎ学」(「とちぎ学 総論」「とちぎ学 各論」)の授業を置き、共通教育科目としてスタートを切ったのである。

(2) 「とちぎ学」のコンセプト

「とちぎ学」とは何か。それは、栃木県内の大学で学ぶ学生が、郷土(あるいは「学びの場」)である栃木県の「魅力」について学び、理解し、それを生かして行くための学習プログラムである。つまり、一般的な郷土史研究とは一線を隔するものである。

それでは、なぜ現在の高等教育機関（作新学院大学）において「とちぎ学」が必要なのだろうか。

その第一には、「地域の絆の再生」という目的が挙げられる。価値観や生活スタイルの多様化は、人々を旧態依然とした「しがらみ」から解放した。しかし一方で、それらは地域社会からの孤立に苦しむ人々を新たに生み出してしまったのではないだろうか。「仕事がちがうから。」「他県からの転入者だから。」「世代がちがうから。」など、その理由は様々であるが、地域の絆が薄くなっている現代社会に適合した形の郷土愛や仲間意識の創出が必要とされていると言えるのではないか。

「とちぎ学」の基本理念は「地域の絆は、歴史と情報の共有から始まる。」である。

現代の若者が学校教育において、地域について体系的に学ぶ機会が設けられているのは、小学校の3・4年生の社会科である。「わたしたちの〇〇〇」という副読本を使つての授業が行われた事を記憶している人は多いだろう。しかし、それ以降は地域について学校で体系的に学ぶ機会はほとんどない。

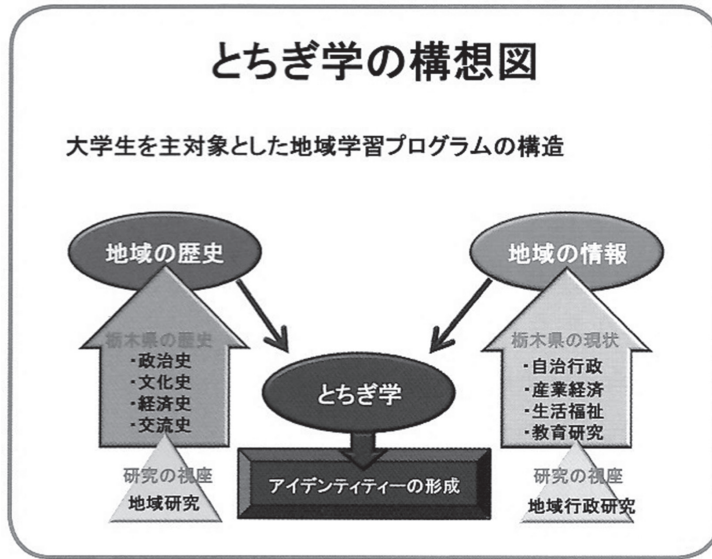
「最近の若者は、地域の事に無関心だ。」という大人のセリフは、かなり昔から言われているように思えるのだが、その若者が地域について知る機会は、戦後の日本の教育の中では少なかった事を忘れてはならないだろう。つまり、若者に対して地域の歴史や情報が適切な形で提供されて来なかったのである。「とちぎ学」つまり高等教育機関において学ぶ「地域学」のコンセプトを考えるにあたり、この事を忘れてはならない事を付け加えておきたい。

(3) 「とちぎ学」のニーズを考える

高等教育機関において「とちぎ学」を学ぶニーズを考えれば、「地域の絆を創出できる若者を育てる（社会に輩出する）。」という事になる。

(4) 「とちぎ学」の構造

【図1】



「とちぎ学」つまり「大学生を主対象とした地域学習プログラム」の構造を図示すれば、【図1】のようになる。「とちぎ学」のプログラムは「地域の歴史」と「地域の情報」という二本の柱から成る。この二つの柱は、「地域研究」や「地域行政研究」の成果が反映される必要がある。そして教育プログラムとしての「とちぎ学」が最終的に目指すものは、栃木県内の大学生の「アイデンティティーの形成」という事になる。

(5) 作新学院大学における「とちぎ学」の授業の内容

それでは、作新学院大学において実施された「とちぎ学」の授業がどのような内容であるのか、具体的に述べて行きたいと思う。授業では、学生自身が栃木県の魅力を発見できるように、栃木県を対象としたSWOT分析をしたり、栃木県の「名物」12種を対象としてBCGのプロトフォーリオの手法を使った分析を行ったり、マーケティングマインドを持って地域を見つめ、地域の未来の発展を考える。また栃木県の歴史について学ぶ。その中には歴史とは呼べない「地域の記憶」とでもいうべき事項も数多く含まれており、これが「とちぎ学」で学ぶ郷土史の特色となっている。その一つが、学生たちが通っている作新学院大学の歴史である。作新学院大学の学生が、自分が今通っている大学が、どのような経緯で生まれ、発展して来たのかという事を意外に知らないのである。例えば「とちぎ学」の授業の中で作新学院の創始者の船田兵吾の写真を見せて「誰か？」と問うたところ、正解した学生は5%に満たなかったのである。これでは学生たちが作新学院大学に愛着や誇りを持つことは難しい。地方大学は、多くの地元の人々の期待と協力があって初めて設立にこぎつける事ができた

はずである。学生たちが、そのような設立の経緯を知った上で、自分が通う作新学院大学を見つめ直した時、地域の人々の温かさや、決して裏切ってはならない地域の期待が本当の意味で理解できるはずである。「とちぎ学」の授業の担当者である私は、このように考え、授業の実施に取り組んでいるのである。

3 栃木県における荒井退造の業績の発掘

冒頭にも述べた通り、今年（2015年）10月20日に作新学院大学では「とちぎ学」の授業において荒井退造をテーマとした特別授業（ゲストティーチャーを招いて行う授業）を実施した。

荒井退造の業績の発掘や顕彰については、沖縄県においては1951年に島田叡知事（当時）、荒井退造警察部長（当時）をはじめ、458名の戦没した県庁職員（当時）を慰霊する「島守の塔」の建立が行われている。沖縄の人々の荒井退造の業績の顕彰・評価には、非常に高く手厚いものがある。また、出版においては1992年の荒井紀雄氏（荒井退造の長男）による『戦さ世の県庁：記録集成』（中央公論事業出版）や2003年の田村洋三氏による『沖縄の島守 内務官僚かく戦かえり』（中央公論新社刊）などがあり、荒井退造が全く無名の人物でなかった事がうかがわれる。

一方で、栃木県内における荒井退造の業績の発掘や顕彰は、戦後70年を迎える2015年まで、それほど盛んではなかった。少なくとも初等教育から高等教育の範囲で荒井退造をテーマとした授業が行われたのは、今年（2015年）からという事になる。

そのせいであろうか、荒井退造に関して残された史料は少なく、その業績の発掘・顕彰についても警察部長として赴任した沖縄時代に集中している。荒井退造の生涯が語られる時、それはまさに点と点を結ぶような状態で語られることが多い。もっとも、それは決して悪い事では無いと私は考えている。史料が少ないからこそ荒井退造という人物を教育の場で語る時には、その「業績（仕事）」を純粹に評価できるのかもしれない。

野口英世や宮沢賢治など、地方出身者で教育の場において「偉人」として語られる人物を概観すると、当初はその「業績」によって評価されていた人物が、詳細な人物研究によって「生身の人間」として、その「人生」が浮き彫りにされてしまう事がある。郷土史研究の分野においては、それが研究の進歩であろうが、教育の分野においては、本来教育の場でその人物を「偉人」として取り上げた理由が希薄化していく事になる。

宮沢賢治の場合には、実弟である宮沢清六氏が生涯をかけて兄である「宮沢賢治」のプロデューサーとして尽力した事により、「教育やまちづくりの場における宮沢賢治」と「文学研究等の学術分野における宮沢賢治」との棲み分けが上手く出来ている。これは、今後荒井退造の顕彰事業を進める上でのひな形となる好例であろう。

現在、荒井退造の生涯およびその業績について、どのように認識されているか。『たじろがず沖縄に殉じた荒井退造 戦後70年 沖縄戦最後の警察部長が残したもの』（NPO 法人 葉の花街道 荒井退造顕彰実行委員会編 2015年下野新聞社刊）に示された年表の記事を元に示せば、以下の通りである。なお、西暦については西田が付した。同書年表において、荒井退造に直接関わる事項ではないが、関連性の高い事項については〈 〉でくり示した。

[荒井退造関連年譜]

【明治33年（1900年）】

9月22日 栃木県芳賀郡清原村大字上籠谷字高田に生まれる。

【大正2年（1913年）】

籠谷尋常小学校（現在の清原南小学校）卒業。

【大正4年（1915年）】

清原尋常高等小学校（現在の清原中央小学校）卒業。

【大正9年（1920年）】

宇都宮中学校（現在の宇都宮高等学校）卒業。

【大正11年（1922年）】

高千穂高等商業学校^{【注1】}から明治大学へ。

【昭和2年（1927年）】

高等文官合格 内務省へ入省。^{【注2】}

【昭和18年（1943年）】

7月1日 沖縄県警察部長となる。^{【注3】}

【昭和19年（1944年）】

2月16日 〈主要農産物の増産計画を策定。〉

3月1日 警察部に輸送課を設置。（職業課を国民動員課に改める。）

3月22日 〈第32軍新設され沖縄防衛本格化する。〉

5月 （南・東・中飛行場、伊江島飛行場、宮古飛行場建設着手。）

7月7日 沖縄県から老幼婦女子を県外に疎開させることが決定。県知事にこの旨通達される。^{【注4】}

7月21日 引揚第一船出航

8月 警察部に特別援護室を設け、疎開を推進。^{【注5】}

8月2日 九州地方行政協議会、沖縄引揚民の受入を協議。

8月9日 内務省「沖縄・鹿児島両県引揚民無縁者引受ニ関スル件」通知。

- 8月22日 学童疎開船対馬丸沈没する。
- 9月 (食糧配給課設置。)
- 10月10日 那覇を中心に大空襲を受ける。
知事、婦女子の即時北部避難を指示。
知事、県庁を普天間の中頭地方事務所内に移動。^[注6]
- 10月29日 (21歳～41歳の男子が防衛隊として招集される。)
- 11月25日 (戦時災害対策本部設置。)
- 11月27日 (戦時食料増産推進沖縄本部を設置。)
- 12月31日 第67回通常県議会。警察部長、県民に年末年始の自粛自戒を要請。

【昭和20年（1945年）】

- 1月7日 (内政部長、県職員の無断職場離脱を警告。)
- 1月10日 知事を除く県首脳と県議会の懇談会。^[注7]
- 1月12日 (知事上京のまま、香川県に転任、島田叡知事発令。)
- 1月中旬 官公吏に県外逃避相次ぐ。
- 1月31日 島田知事着任。県庁舎で執務。
- 2月7日 第32軍長参謀長県庁訪問。住民食料六ヶ月分の確保と老幼婦女子の北部緊急避難を要請。県平時行政事務を停止、「疎開立退」と「食糧確保」の業務に専念。
- 2月10日 緊急市町村長会議、住民の北部への退避を指示。県内人口調整要項を発表(2市2都から10万人国頭へ立退計画)。
- 2月14日 内政部長上京(そのまま帰任せず)。
- 2月下旬 警察警備隊を編成(隊長、荒井警察部長)。
- 2月22日 塩谷警察署開庁式
- 3月24日 米艦隊出現、艦砲射撃始まる。
- 3月25日 警察部長、名護より砲撃下を那覇に帰着。警備隊本部を指揮、識名に移動(米軍慶良間列島に上陸。知事、県庁の首里移動を命令)
- 4月1日 米軍、北谷村嘉手納の海岸に上陸、沖縄本島を両断。
- 4月24日 軍から非戦闘員の首里立退命令。
- 4月27日 繁多川壕内で市町村長会議。島田知事、食糧確保、豪生活の指導、士気昂揚を指示。
後方指導挺身隊を編成(本部長、知事。幕僚班、荒井警察部長、佐藤特高課長、古郡農務課長外。隊長、久保田土木課長)。
- 4月29日 那覇特高警察署を豊見城村に、首里警察署を真壁村に移動させ、住民の避難誘導、保護に当たらせる。

- 5月13日 警察別働隊を編成、警察部長、謝花警部以下8名を隊員に任命し、県庁職員及び県民の活動上京を内務省に報告するよう命令。
- 5月22日 軍司令部、首里法規を決定。
- 5月24日 島田知事、内務省に意見具申の電報。
- 5月25日 知事、挺身隊本部に内部へ撤退を命令。
- 5月25・27日 荒井警察部長、内務省に状況報告打電、以後通信途絶する。
- 5月27日頃 知事、警察部長一行繁多川壕を出て志多伯の壕へ、一泊後、大城森の壕へ移動。
- 5月29日 与座の第24師団壕で軍・民協議、軍から住民の知念半島誘導指示される。
- 5月30日 第32軍司令部、摩文仁へ移動。
- 6月3日 知事、挺身隊を小班編成とし分散、難民保護を命令。
知事、警察部長、伊敷の轟の壕へ移動。
- 6月9日 警察部長、警察警備隊の解散を命令。警察官それぞれ敵中突破を図る。
荒井警察部長、伊野波警防課長に本土へ脱出し内務省に報告方を命令。
- 6月14日 知事、警察部長、轟の壕を出て軍司令部壕へ向かう。
- 6月18日 知事と警察部長、軍司令官、参謀長に最後のあいさつをする。軍医部壕に入る。
- 6月21日 仲宗根官房主事と中村巡查部長、国頭へ向け脱出のため壕を出る。
- 6月22日 牛島司令官、長参謀長、摩文仁で自決。
- 6月26日 島田知事、荒井警察部長、壕を出る。以後消息不明となる。
- 7月2日 米軍、沖縄作戦終了を宣言。

以上が、荒井退造の生涯という事になる。年譜の項目数からも分かるように、荒井退造の記録は、1943年（昭和18年）に沖縄県の警察部長に赴任してからのものが多い。つまり荒井退造の人的評価は、沖縄戦の中で警察部長（軍人ではなく官吏）として、どのように行動し沖縄県民の保護に尽くしたかという事によって行われているという事である。

今後、荒井退造の研究が進み、この年譜の行間を埋める新たな事実が明らかとなって行くだろう。それは郷土史研究の発展という意味で歓迎すべき事であるが、一つ忘れてはならない事は、荒井退造をテーマにした教育（授業）が初等・中等・高等教育機関で一斉に行われた2015年の時点で、荒井退造の人物像を構成する史実はこの年譜において記されたものであった、という事である。

私が、あえてのような事を述べるのは、実在の人物を教材として（またその人物を「偉人」として）取り上げた場合、その後に明らかとなった事実の全てを「偉人」の行為として評価したり、またそのような事実を以て「偉人」の批判が展開される事にも問題を感じ

るからである。

初等・中等・高等教育機関を問わず、教育の現場において荒井退造を取り上げる時には、「なぜ、2015年に荒井退造をテーマとした授業が行われたのか。」という2015年時点の社会的背景と荒井退造に対する認識及び評価の確認を怠ってはならない。少なくとも授業を行う者は、それを起点とすべきである。

4 荒井退造と「とちぎ学」

(1) 「とちぎ学」において荒井退造をどのように扱うべきか

① 荒井退造の生涯から導き出される授業のテーマ

それでは、「とちぎ学」の授業において荒井退造を取り上げる事に、どのような意味があるのだろうか。大きく2つの事が考えられる。

一つには、平和学習に分類されるものである。太平洋戦争、とりわけ日本国内で唯一の地上戦が戦われた沖縄において、栃木県出身の荒井退造が沖縄県民の避難・保護のために命をかけて働いたという事実を通して、命の大切さや、その命を簡単に奪ってしまう戦争の恐ろしさ、平和の尊さを学ぶという意味がある。「荒井退造の生涯を通して、平和と命の尊さを学ぶ。」という授業のテーマは、ある意味で初等・中等教育において荒井退造を取り扱う場合にも重要・普遍のテーマであり、基本である。

いま一つは、高等教育において「仕事」というものを深く考える（キャリア教育）の授業のテーマである。前章でも触れているが、荒井退造が沖縄県に赴任した時、太平洋戦争の流れは、まだ絶望的な一億総玉砕的なものでは無かった。アッツ島の日本軍守備隊の玉砕や山本五十六長官の戦死は、遠く最前線での話であった。多くの人が涙を流し仇討を誓ったといわれるが、その感覚は、日清戦争や日露戦争のように日本国外の戦場で起こった悲劇という位置づけであったろう。しかし、戦局が悪化する中で、沖縄の状況が変わり、その中で荒井退造は、沖縄が戦場になるという確信を持ち、住民の引揚（疎開）に尽力するのである。10・10空襲以降は、沖縄への敵の上陸が確実となる。官吏の中には、出張や病気療養などを理由に、沖縄を離れる者も現れる。しかし荒井退造は、沖縄県民の避難のために現場の最前線に立って部下を指揮していたのである。残された荒井退造の言葉から、彼が決して死地を求めて仕事に邁進していたのでは無い事は明らかである。彼はひたすら「任務の遂行」に努めたのである。それは彼自身の「責任感」によるものであろう。「荒井退造の生涯を通して、仕事と責任について考える。」という授業のテーマは、これから社会人として地域を支える人材となる学生に、ぜひとも学んでほしい内容である。

なお、平成27年度に作新学院大学における荒井退造をテーマとした「とちぎ学」の授業では、まず第一のテーマである「荒井退造の生涯を通して、平和と命の尊さを学ぶ。」

事を確実に実行する事にした。ゲストティーチャーの荒井俊典氏を招いての初めての授業であり、その打合せの段階から、テーマを絞って解りやすい授業をめざした。第二のテーマ（そして高等教育機関ならではのテーマ）である「荒井退造の生涯を通して、仕事と責任について考える。」については、今後の課題という事になる。「とちぎ学」の荒井退造の特別授業は、荒井退造の生誕120年となる2020年までは続ける予定である。今後授業の改善と共に、この2つのテーマをバランスよく盛り込んだ授業を実施して行きたいと考えている。

② 歴史的背景の理解の必要性

今回、「とちぎ学」の授業で荒井退造をテーマに取り上げる上で、いま一つ解消しなければならない課題が存在した。それは学生の太平洋戦争に関する基礎知識の補足である。大学（高等教育機関）において太平洋戦争についての知識にはばらつきがある。中には、日本とアメリカが約70年前に戦争をしていた事を知らない学生がいる事も予想された。そこで、冒頭に示した10月20日の特別授業に先立つ10月13日に、私は「太平洋戦争と清原地域出身の偉人 荒井退造」というテーマで授業を行う事にした。

授業の内容は「1 太平洋戦争について」「2 太平洋戦争の経過」「3 沖縄戦（太平洋戦争で唯一の国内地上戦）」「4 沖縄島民を疎開（避難）させたのは誰か?」「5

今も沖縄県の人々に感謝されている栃木県人 荒井退造」「6 戦争の中で沖縄県民の命を救うために全力をつくして死んだ 荒井退造」という6つのパートに分かれるものであった。この事前学習を兼ねた授業により、受講者（学生）の多くが太平洋戦争と沖縄戦、そして荒井退造について基本的な知識を得て10月20日の特別授業の臨むことができた。つまりゲストティーチャーの荒井俊典氏が「荒井退造は・・・。」と話された時に、少なくとも受講生（学生）の大半が、荒井退造という人物の名を初めて聞くという事は無かった。「あの、荒井退造か。」という学生の基本的な理解のもとに特別授業を進める事ができたのである。

(2) 荒井退造を学ぶ教育的効果と社会的効果について

私は、「とちぎ学」において荒井退造をテーマとした授業を行う効果には、教育的効果と社会的効果の双方が期待できると考えている。最後にこの二つの効果について述べておきたい。

第一の「教育的効果」については、前項においても触れたように「荒井退造の生涯を通して、平和と命の尊さを理解する。」という事と「荒井退造の生涯を通して、仕事と責任を持つ。」という2点について、学生（学習者）の内的成長という効果を生み出す事ができよう。

第二に挙げた「社会的効果」については、そのような内的成長の経験を持つ若者が、栃木県において社会人として活躍するという事である。これは決して荒井退造のように命を落としても職務を全うするというものでは無い。しかし、荒井退造の生涯を通して「仕事とは何か。」「仕事の責任とは何か。」「自らが得た職権は、誰のために使うべきものなのか。」という事を深く考える経験を持ち、また荒井退造という郷土が生んだ偉人をひとつの「モデル」として仕事に取り組むことのできる人材を地域（特に栃木県内）に輩出する事ができれば将来栃木県を職業モラルの高い県に成長させて行く事も、決して荒唐無稽な事では無いであろう。コストダウンや効率化が優先される現代社会において、顧客の幸福を第一とし責任感を持って仕事に打ち込む職業人に育成。栃木県の地方大学が、このようなキャリア教育意識を持って学生の教育に当たれば、地域（特に栃木県）の活性化を支える人材の育成が実現するのである。

作新学院大学の「とちぎ学」の授業で荒井退造を学ぶという事は、そのような社会的効果を期待できるものなのである。

5 おわりに

以上、作新学院大学における「とちぎ学」の取り組みと、授業テーマとしての荒井退造について、その人物学習における位置づけについて論じた。もっとも、荒井俊典氏と共同で「とちぎ学」の特別授業を計画し始めたのが2015年8月である。私自身の荒井退造研究が不十分なため、荒井退造に関する多くの部分を荒井俊典氏にサポートしていただきながら、とにかく授業を成立させる事ができた。荒井俊典氏に深心より感謝申し上げる次第である。

紙数の関係で、詳しく触れる事が叶わなかった荒井退造をテーマとした授業については、母校である宇都宮市立清原南小学校^[注8]や、栃木県立真岡工業高校^[注9]における取り組みなど、先行する優れた取り組みがある。

荒井退造の出身地である宇都宮市及び栃木県では、戦後70年をきっかけとして荒井退造への関心が非常に高まっている。新聞などのメディアにおいても、荒井退造を取り上げる機会が増えている。そのような中で高等教育機関である作新学院大学では、栃木県の未来を支えて行くべき作新学院大学の学生に対して「地域学習」と「キャリア教育」の両面から荒井退造をテーマとした授業（「とちぎ学」）を実施した。

今、荒井退造をテーマとした人間教育が、その出身地である宇都宮清原地区（旧芳賀郡清原村）を中心に、広がり始めている。しかし、「人物」特に「偉人」をテーマとする教育には、様々な困難が伴う。荒井退造をどのように教えるのか。人物教育・キャリア教育における「普遍的なモデル」としての荒井退造は、「公的人格」を抽出した形で授業に取り上げて行くことが必要となろう。その「公的人格」の抽出には、プロデューサー役を務

める人物がどうしても必要となる。荒井退造顕彰事業実行委員会代表の荒井俊典氏の果たす役割は非常に大きいものがある。

〔注記〕

- 【注1】 現在の高千穂大学。私学としては日本初の高等商業学校。(上京した荒井退造は、警視庁の巡查として働きながら明治大学の夜間部で学んだとされる。〔同書 室井光氏の「講話」による。〕)
- 【注2】 その後、麻布六本木の署長、万世橋の署長、ハルビンそして長春の警察署長、奉天の警察庁理事官、福島県・山口県・長野県・福岡県において部長クラスの職、福井県の官房長を歴任している。〔同書 室井光氏の「講話」による。〕
- 【注3】 この時期は、同年4月に山本五十六海軍長官が戦死、5月にアッツ島玉砕と、連合国の反撃が強まった時期である。御前会議において「絶対国防圏」が決定されるのは9月30日であることから、荒井退造が沖縄県に赴任した時点では、まだ沖縄戦が切迫した状況ではなかったと言えよう。
- 【注4】 疎開(引揚)は、奄美大島、徳之島、沖縄島、宮古島、石垣島が対象となった。当初の計画では、沖縄県から本土(九州)に80,000人(その後50,000人)、台湾へ20000人、計100000人が県外に疎開する予定であった。沖縄県民の受け入れに関しては荒井退造と入れ替わりに大分県知事(1943年7月～1944年10月)として転出した元沖縄県知事の早川元が尽力したと言われている。
- 【注5】 当初は「引揚」の語を用いられた。公文書などに記された「引揚」は、「疎開」と同義に捉えて良いものである。
- 【注6】 後に九州地方行政協議会会長の命令で11月3日に那覇へ復帰。(下野新聞社刊『たじろがず沖縄に殉じた荒井退造』年表による。)
- 【注7】 知事の泉文作は、東京に出張していた。在任期間中9回の出張で沖縄県を離れた泉知事に対しては、現在でも批判的な意見が多い。
- 【注8】 2015年1月19日に、室井光氏の講話が行われた。同年6月9日には、荒井退造顕彰事業実行委員会による関連図書5冊の寄贈が行われ、図書室入口に「荒井退造コーナー」が設けられた。
- 【注9】 2015年9月15日に、栃木県立真岡工業高校地理歴史科原作・原案の漫画教材『島守の紀 沖縄警察部長 荒井退造の記録』が作成されている。

〔参考文献〕

- ・『1億人の昭和史 3 太平洋戦争 市等1347日』毎日新聞社編(1976年 毎日新聞社)
- ・『あの戦争 太平洋戦争全記録 上・中・下』産経新聞社編(2001年 産経新聞社)
- ・『秘話で読む太平洋戦争2〔ガダルカナルの死闘から玉砕・特高、沖縄、降伏まで〕篇』太平洋戦争研究会編(2001年 河出書房新社)
- ・『沖縄の島守 内務官僚かく戦えり』田村洋三(2006年 中公文庫)
- ・『たじろがず沖縄に殉じた荒井退造 戦後70年 沖縄戦最後の警察部長が残したもの』NPO法人 菜の花街道 荒井退造顕彰事業実行委員会編(2015年 下野新聞社)

* 作新学院大学女子短期大学部 幼児教育科 教授